

## 授業方法について独自に工夫していること

導入では、プレゼンを用いて、前回の復習を端的にまとめた形で整理を行っています。  
展開は、本講義に関しては、一人一人に模擬授業(15分)をさせました。その後、30分間の協議会をグループ毎でさせました。最後に、各グループで話し合ったことをシェアリングしました。

図画工作科の理念と実技力のバランス良い育成(=実践力)のため、「体験、講義、制作実技、指導案作成」の4つのパターンで、図工の全領域についてそれぞれ学ぶ授業構成を行っている。

- ・【体験】教員が行う模擬授業を体験し、その領域の内容を直感としておさえる
- ・【講義】直感的におさえたものを、領域ごとの目標や内容と照らし、根本的な概念(理念)の習得のため、講義を行う
- ・【制作実技】理念を大方おさえ、参考作品づくりに取り組み、子どもと教師の両視点から教材について考えを深める
- ・【指導案作成】実践的な授業を想定した略案作成を通して、教材と授業と指導事項を結び付ける力を見につける

他専攻の学生が対象の授業であることから、まず教科の内容に興味を持って取り組んでもらえるように努力している。

第一に、最初の教科教育科目ということで、授業実践記録から、イメージ豊かに実践を読み取るのが難しいようなので、まずは実践記録を台本に5人グループで、教師・子ども役を決めて、授業をやってみて、検討するようにしている。

第二に、授業実践例や教材を用意し、いろいろな見方・考え方と出会ったり、矛盾や葛藤、論争点を明確にして粘り強く討論ができたりするように考えている。特に、対立点を明確にしつつ、それを超えて教授・学習のイメージが膨らみ、見方づくりにつながるようにしたいと考えている。

水泳は能力差が大きく、好き嫌いの差が大きい種目特性はあるが、その理由や水泳の指導方法の体系的な考え方を初回授業で講義し、自ら創造できるように次回からの実技を実施している。特に安全面について、細かく指導を行っている。

絵を描くことに自信を持っていない学生が多いことを踏まえて、描き方をきちんと教えてもらえれば自分でも描けるということを体験させるように努めている。自分が描けないような絵を学校現場で子どもたちに教えられる筈がないので、道具の置き方や物の見方、描き方を教えている。小学校図画工作科における題材数は、小1～6を合算すると、決して少なくない数になるため、時間をかけて少しのテーマを扱うのではなく、15回の授業の中で10のテーマについて学生たちが描き方と教え方が学べるように、理論を踏まえつつ授業を行っている。出欠は毎回の作品提出でチェックできる。また、学生たちは自身の絵の具を持参させると、小学校の児童たちと同様にパレットに僅かな絵の具しか出さず、それが絵を描くうえで失敗の原因につながりやすいため、授業者が絵の具と画用紙を持参して、好きなだけ使えるように配慮している。

おおよそ毎時間、ワークシートを用意し、思考を促すように課題を与えている。

全体一斉指導とグループ学習を取り入れ、学習成果をグループ発表形式で実施している。

これらの授業は、小中学校の音楽科授業を行うために必要な知識と技術を身に付けるものであるが、音楽科授業の枠内に止まることなく、広く学校内音楽活動(合唱コンクールや学習発表会、音楽系部活動等)や一般の音楽教育(お稽ごとや一般音楽団体等)に関わる事柄に興味関心を抱かせるように工夫したつもりである。さらに、音や音楽に関する人間行動や発達に関する見識を持つよう、授業内容を考慮したつもりである。概ね、受講者には受け入れてもらえた判断しているが、「難易度が難しすぎる」「授業回数が少なすぎる(実際は授業回数を確保している)」「授業内容が多すぎる」「授業時間が短すぎる(実際は時間前に終わったことは無い)」と回答した者が1~2名いたことから、「難易度を落とす、内容を簡単なものにする、課題の量を減らす」等を検討している。しかし安易な方向へ合わせていくことに疑問を感じている。

独自の工夫かどうかは分かりませんが…

学校における授業実践場面のVTRを用いて、理論的な説明と実践場面の具体を関連付けています。毎時間にミニレポートと称して、学生個人の理解と解釈、質問、授業批評を自由記述で書いてもらっています。そのコメントに対して毎回朱書きで回答したり、授業のトピックとして取り入れたりしています。研究室アドレスを積極的に提示し、質問や意見を随時受け付けるようにしています。これは卒業後のアフタケアとしても連絡可と説明し、教師になった時、現場で困ったことがあった場合、自分を頼ることができると伝えています。(卒業生から年に何回かはメールが入ります。)

体育実技のため、まずは動いてそこから考えるような工夫を行った。

- ・授業内容を理解する上で一定の予備知識が必要な場合は、その知識習得のために少なくとも1回程度の授業時間を充てることとしている。
- ・プロジェクターを使用して授業を進めているため、ノート・テイキングの時間が余裕をもってとれるよう前もってプロジェクター資料をプリントとして配布している。
- ・家庭科を専門としない学生でも内容が理解できるように、可能な限り一回当たりの授業内容の量をしぼっている。

- ・3講座とも教育実習に行く前の授業でしたので、教師になるという前提で、現場に即した講義を行いました。
- ・講義方式だけでなく、教育現場での学び方を伝え、話し合い活動を多く取り入れました。
- ・学生さんたちが、自らも学んでほしいと願い、視聴覚教材、実習、実験を多く取り入れました。

ピアノの個人レッスンを担当していて1人あたりの時間が短時間なので、効率よくレッスンができるように工夫している。まず初回の授業や各授業の冒頭に、演奏方法や曲についてのアドバイスを全体指導した上で、効率の良い個人レッスンをする様に心がけている。また授業では個人レッスン・個人練習だけではなく、互いのピアノレッスンを聴き合う時間を取って、学生同士が刺激を与え合う機会を作っている。

学生それぞれに音楽性や演奏方法に個性があるため、演奏法や音楽を否定するばかりではなく、それを生かして伸ばす指導を目指している。

- ・理論を最初に説明し、それについての実技を取り入れていること。

- ・少人数による話し合い活動
- ・簡単な試作や試しがきをさせること

授業時間内にできるだけ幅広い数多くの技法を学ぶことができるように、平面的な制作と立体的な制作に分けるなど内容や説明する順序等を工夫している。授業の始めに、教員自らが授業で扱う技法を使って実際に作品を作りながら、一つ一つの技法について制作のポイントや注意点を話すように心掛けている。

・毎回、ミニレポートを提出させ、学生の理解度や学びたいことを把握しようと考えた。また、ミニレポートに対する私からの見解を毎回書き、授業以外においても意見の交流ができるように努めた。  
・体育科教育A・Bでは、次の①②③の順で反転的な授業に挑戦した。①学生に授業前までにYou Tubeにある文部科学省作成の「小学校体育デジタル教材」を視聴させ、「疑問点」を付箋に一つ書いてもってくる。②授業開始前にホワイトボードに貼って、その疑問を整理するところから授業が始まる。③その疑問をもとにグループで協議し発表する。④領域別の小学校運動教材資料を使って本時のまとめをする。  
・体育科研究では、模擬授業を経験し、小学校体育の運動領域の理解を深めるようにした。

遅刻をしないよう指導している。作業は持ち帰らずに、授業時間内に終わらせるよう努力している。

人数が多いので6グループにわけて時間を指定しその他の時間は自由に練習できるようにしました。

ピアノを弾く経験の有無で大きく差がでる科目です。  
初心者には基本的なこと、経験者にはより音楽的なことというように個々に応じた指導を心がけています。

ピアノを弾く経験の有無で差が出やすい科目です。  
ピアノ初心者には、簡単に弾けるように音を少なくする弾き方を指導しています。

毎時間レジュメと資料を作成し、それに沿って授業を進めている。

初めて担当する授業だったので、まず受講生が退屈しないように心がけた。

最初の授業で、授業全体の内容がわかる資料を配付、また、毎時の小レポートの内容から、授業に対する批判(分析)箇所等を確認し、次の時間の授業に反映させる。

競技経験を活かした内容を、学生の視点で消化できるように工夫して臨んだ。

図画工作科研究A I の課題は自分の専門テキスタイルの内容から選択している。羊毛でフェルトメイキング技法、テーマはみなさんと相談して決めた。昔話やメルヘン10種類で10グループを作り立体造形のマスコットを各自で仕上げからステージで一緒に発表した。個人とグループの組み合わせで楽しくできた。  
二つ目はうちわを粹に織をした。テーマは夏。作品の形が日本的で学生たちは一生懸命課題に取り組み達成感があると感じた。

学生が興味をもつような教材づくりを心がけ、プリント作成に工夫をしている。  
また、実際に小学校や中学校で使われている教材をできるだけ多く紹介するようにしている。

本授業では、まず学生のみなさんが音楽を体験し、自分自身が音楽を感じてから、音楽の要素や仕組みを理論的にも理解できるような授業展開を工夫しました。その音楽体験を通して、指導者として授業をする際のアプローチの方法、授業の流れ、配慮の仕方、留意点にも気づくようにしました。体験の中で活動形態を全体、グループ、少人数、個人とねらいや内容によって変化させることや、音楽を感じるために動きを使った活動を取り入れることの意義も感じてもらえるようにしました。そして、音楽という科目の特徴や柔軟性を知り、他教科との連携や学校生活全体への取り組みにも音楽が幅広く応用できる可能性を知ること、現場での実践に役立ててもらいたいと考えました。

できるだけ実技(歌唱・器楽演奏など)をとりいれる。アンサンブルの機会を増やし、学生同士のコミュニケーションに役立たせる。

- ・実際の教育現場で使用している資料などを提示したり活用したりしている。
- ・実際の授業で使用する内容から選択し、具体的な活動を通して指導法を身につけることができるようにしている。
- ・低学年指導では、教育現場で即実施できるよう、体験的に学ぶことを意識的に行っている。
- ・小学校6年間を見据えて、各項目を段階や系統を意識した内容にしている。

ピアノの経験者と非経験者の差が大きく出る科目である。非経験者には技術的に複雑でない曲、経験者にはそれ相応の曲を指定するなどしている。時間に余裕があれば、手首の位置や簡単にグランドピアノの構造を説明し、注意すべき左右のテクニックや音量の違い、聞こえてくる音のバランスの大切さについても説明するようにしている。

一方的な講義だけでなく、資料から読み取れることを考えさせたり、4~5人のグループで話し合いをし発表する機会をできるだけ作った。グループの話し合いによって、忘れていたことを思い出したり、自分とは違う発想に感心したという意見があった。

授業で取り上げない資料も含めて提示し、予習時に得られる情報の多様性に配慮している。課題などの計画を初回授業ですべて公開し、学生自身で学習時間の計画が立てられるよう配慮している。

技術科の授業づくりをテーマとした授業である。活動的学ぶオリジナル教材の標準的授業展開を実演した後、その授業を学生が自分なりに改善して模擬授業で確かめて、学び合うという一連の展開にすることで、授業における目標の明瞭化、授業構成の明瞭化、具体的な発問の効果など、指導法の要部分への考察が集中しやすいように工夫した。